被災地に居住する高齢者の生活活性化に求められる交流環境の検討とその効果 ～岩手県釜石市北部地域を対象として～

The Environment for Communication to Activate Elderly People in a Disaster-affected Area
~ A Case Study in the Northern Area of Kamaishi City, Iwate Prefecture ~

佐々木大也*・鳩山紀一郎**
Hiroya SASAKI, Kiichiro HATOYAMA

In disaster-affected areas, lots of elderly people are said to reduce their frequency to go out due to the change of living environment. In such areas, it is necessary to provide environment for communication to activate them so that they can keep good health. For this purpose, in Kamaishi city, a new public transportation service, Demand Responsive Transport, was introduced after the 2011 Tohoku earthquake, whose effect is found limited so far. Therefore, to clarify the environment to activate elderly people and to verify its effects, we conducted a semi-structured interview survey and suggested two ways to activate them by relieving their sense of "hesitation": to hold events to gather people again who scattered after the disaster, and to communicate with elderly people directly. As a result of implementation, we could partially confirm that these two measures have effects on elderly people's daily-life activation.

Keywords: the 2011 Tohoku earthquake, disaster-affected areas, elderly people, daily-life activation, semi-structured interview, sense of hesitation
東日本大震災、被災地、高齢者、生活活性化、半構造化インタビュー、遠慮

１．はじめに

(1) 研究の背景と目的

2011 年の東日本大震災の被災地では、現在も多くの被災者たちが仮設住宅で暮らしている。被災前には近所付き合いのあった町内会などの地域コミュニティが、被災者の仮設住宅移転に伴い分散したために、特に高齢者にとってはその物理的生活環境に加え、交流環境も大きく変化した。

既往の研究から、西村ら[1)]は高齢者の交流関係には地域コミュニティや地理的近接性が大きく影響していることを、岡戸ら[2)]は友人や近隣住民との付き合いが多い高齢者ほど生命予後が有意に良好となることを、笹ら[3)]は高齢者にとって居住地の変化は外出行動の減少をもたらし、身体機能の低下や有病率の上昇に繋がることをそれぞれ示している。従って、被災地では生活環境・交流環境の変化によって高齢者の生活が不活発になることが懸念されており、実際に大川[4)]は被災地における生活不活発病[(1)]の発生を報告しており、吉村[5)]は集合住宅の一人暮らし高齢者への即刻な地域間交流の必要性を述べている。これに対し、寺川ら[6)]は過疎地の高齢者の人的交流の促進には交通手段の整備が必要としており、三宮[7)]は高齢者の QOL 向上のためには、更に外出機会の提供も必要としている。東日本大震災の被災地の仮設住宅には公共交通不便地域に立地するものも多く、宮城県南三陸町の災害臨時バスや岩手県陸前高田市のデマンド交通など、交通弱者のための交通手段の整備は進みつつある。一方で、望ましい外出機会の提供方法に関しては、北海道浦幌町を事例とした山崎ら[8)]の研究などの試みはあるものの、被災地に着目すると知見はまだ少ない。

以上を考え合わせて、本研究では交通手段と人的交流を伴う外出機会の状況を合わせて「交流環境」と定義し、東日本大震災の被災地を例に、被災地に居住する高齢者の生活活性化に必要と考えられる交流環境の要件を明らかにし、その効果を検証することを目的とする。

(2) 研究の対象地域

岩手県釜石市北部地域（図 1 に示す 5 町、以下「対象地域」と呼ぶ）でも、交通弱者への補完的交通手段として、2012 年 10 月よりオンデマンドバス「にこにこバス」の運行が始まった[(2)]。なお、対象地域の人口は 2012 年現在で 5,533 人（うち高齢者 1,722 人）、面積は 85.6km^2 である。

図 1　釜石市北部地域（Google Map より作成）

にこにこバスの日平均利用者数は運行開始当初の 6.2 人（2012 年 11 月）から、当初は運行範囲に入っていなかった箱崎町への拡大などを経て現在は 13.4 人（2014 年 3 月）と徐々に伸びてきているものの、デマンド交通が運行されている他地域の事例と比較すると[(3)]、十分に活用されている状況ではない。従って、高齢者の生活活性化のためには、にこにこバスを交通手段として便利なものにするだけでなく、高齢者の外出状況や外出に対する考え方を把握しつつ交流環境の改善のために活用していく必要がある。

*　正会員　東日本高速道路株式会社 (East Nippon Expressway Company Ltd.)
**　正会員　東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (The University of Tokyo)

(3) 研究手法および構成

以上より本研究では、まず対象地域の仮設住宅に居住する高齢者の外出状況を調査して実態を把握し、次に、高齢者への半構造化インタビューから生活活性化に求められる交通環境の要件を探る。最後に、その要件を満たすと考えられる生活活性化方策を実際に行ってその効果を検証する。

2．仮設住宅居住者の外出状況調査

(1) 調査の概要

2013 年 8 月 2 日～4 日に対象地域の仮設住宅を対象として調査員 10 名で戸別訪問調査を実施した。回答者は 324 人（うち高齢者 123 人）である。なお、対象地域の仮設住宅居住者数は 1,471 人（うち高齢者 419 人）である。以下では、高齢者の回答結果を示す。特に仮設住宅を対象としたのは、被災前後で大きく生活環境・交流環境が変化していると考えられたためである。なお、調査にあたっては回答を強制することの無いよう留意した。

(2) 調査結果

調査の結果として得られた対象地域の仮設住宅に居住する高齢者の外出頻度を、「自分で車を運転して移動する人」と「自分では運転しない人」に分け、水野 [9]による全国の要支援・要介護に認定されていない高齢者 515 人の外出頻度と比較したものが図 2 である。また、外出目的については図 3 のような結果となった。

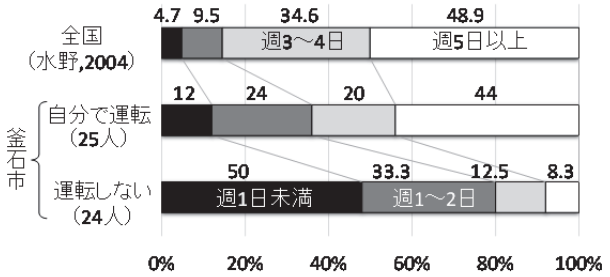

図 2　高齢者の外出頻度の比較

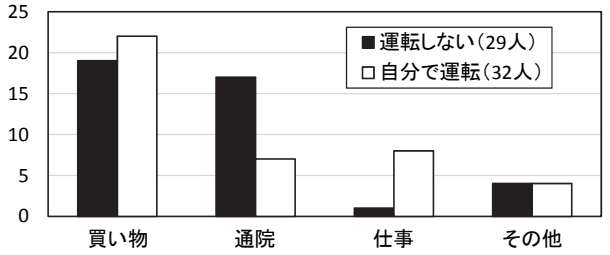

図 3　高齢者の外出目的

図 2 から、対象地域の仮設住宅に居住する高齢者の外出頻度は低い傾向にあるが、中でも自分で車を運転しない人の外出頻度が著しく低いことが分かる。また、図 3 より高齢者の外出目的は、買い物や通院など、生活上必要なことに限定されており、人的交流を伴うものは少ないことが分かる。加えて、自分で運転する人と比べて自分で運転しない人は通院の割合が高く、実際、買い物については移動販売や生協の配達を利用したり、家族に買ってきてもらったりするという意見が多く聞かれた。なお、その他の外出目的としてはデイサービスや市役所などがある。

以上のことから、高齢者の生活が不活発になっている可能性が確認された。従って、生活活性化のための交流環境としては、交通手段を提供・改善することと、人的交流を伴う外出機会を創出することが重要であると考えられる。

3．交流環境に関するインタビュー調査

(1) インタビュー調査の概要

高齢者に必要な交流環境の創出には、外出行動や人的交流を伴う外出に対する高齢者の意識を詳細に把握することが必要となる。そのため、対象地域に震災以前に居住していた高齢者に対して交流環境に対する意識について、半構造化インタビュー形式による調査を行った。にこにこバスの運行範囲の中で地理的条件が異なり[4]、対象地域の中でも特に被災の程度が大きかった二つの町内会（以下、それぞれ A 町内会、B 町内会とする）を対象とした。なお、A 町内会は鵜住居町内に位置し、B 町内会は箱崎町内に位置する。それぞれの町内会の震災前における人口規模は約 210 世帯、約 240 世帯である。インタビュー調査の概要を以下の表 1 にまとめる。なお、交流環境が変化したのは仮設住宅の住民だけではないと考えられたため、自宅に居住する高齢者についても調査対象とした。

表 1　インタビュー調査の概要

■インタビュー実施手順
各町内会長に対象者の選定を依頼。調査員 1 名が行う主な質問に対して自由に回答してもらう半構造化インタビュー形式。所要時間は 1 件 90 分程度。
■インタビュー実施時期
実施時期は、2013 年 10 月下旬より 11 月中旬までの約一カ月間
■インタビュー対象者
高齢者 24 人（A 町内会 8 人、B 町内会 16 人）
■主な質問項目
平均的な一日の生活、震災前後での生活の変化、現在の外出状況、周りの人との交流状況、現在の生活における希望や困難な点など

(2) インタビュー調査結果の分析

インタビュー対象者の情報を表 2 に示す。各インタビュー対象者に付したラベルは、アルファベットが所属町内会を、数字が世帯を、夫婦の場合は夫を h、妻を w で表す。交通手段は、自車 : 自分で運転、家車 : 家族の運転、バス : 路線バス、にこ : にこにこバス、徒歩 : 徒歩である。

住居については仮設住宅 16 人、自宅 8 人となり、交通手段については自分で運転する人が 11 人、家族の運転による人が 8 人、路線バスを使う人が 9 人、にこにこバスを使う人が 1 人、徒歩が 1 人となっている。路線バスやにこにこバスを使う人も、主要な交通手段は自家用車という人が殆

どであった。また、外出頻度を見ると、6 割以上の人が週 5 回以上外出しており、結果的に生活が不活発になっている人にはインタビューは実施することはできなかった。

表 2　インタビュー対象者の情報

No.	ラベル	性別	年齢	住居	交通手段	外出頻度
1	A1h	男	75	仮設	自車	毎日
2	A1w	女	67	仮設	自車	毎日
3	A2h	男	75	仮設	自車	週 5 回
4	A2w	女	71	仮設	家車,バス	週 3 回
5	A3h	男	80	自宅	自車,バス	毎日
6	A3w	女	80	自宅	家車,バス	毎日
7	A4	女	65	仮設	バス	週 6 回
8	A5	女	80	仮設	徒歩	毎日
9	B1h	男	75	自宅	自車	毎日
10	B1w	女	73	自宅	家車,にこ	週 4 回
11	B2h	男	82	仮設	自車	週 4 回
12	B2w	女	75	仮設	家車	週 2 回
13	B3	男	77	仮設	自車	週 5 回
14	B4	男	73	仮設	自車	週 5 回
15	B5h	男	75	自宅	自車	週 4 回
16	B5w	女	75	自宅	家車	毎日
17	B6	女	73	仮設	バス	毎日
18	B7h	男	83	仮設	自車	週 5 回
19	B7w	女	81	仮設	家車	週 2 回
20	B8	女	75	仮設	バス	毎日
21	B9	女	77	仮設	バス	毎日
22	B10h	男	82	自宅	家車,バス	週 2 回
23	B10w	女	80	自宅	家車,バス	週 2 回
24	B11	男	67	仮設	自車	毎日

結果の分析にあたっては、大谷[10]による SCAT に基づき、まず交流環境に関する発言を全 261 抽出し、それらを 14 のサブカテゴリーに分類し、さらに上位の 3 カテゴリーに分類する作業を行った。分類結果を代表的な発言とともに示したものが表 3 である。サブカテゴリーの後の（）内の数字は、発言した人数を表している。なお、(III-iii)に該当する『遠慮』というサブカテゴリーについては、表 4 で詳述するためここでは割愛している。

分析の結果、『日常生活における生きがい』に関する発言から、人的交流の重要性を認識する高齢者も少なからずおり、また、『生活を活性化しようとする意識』に関する発言から、自ら外出機会を創出しようとする高齢者も多いことが伺えた。しかしながら、同時に外出行動の抑制に繋がり得る意識として、『遠慮』のサブカテゴリーが抽出された。

そこで、『遠慮』について述べている発言について全てまとめて示したものが表 4 である。先述のとおり、今回のインタビュー対象者は比較的活発に外出している人が多いが、それでも被災地で生活環境・交流環境が大きく変化した中で、『遠慮』という意識を多くの人が抱いており、これによって高齢者が自らの活動を制約していると考えられた。そこで以下では、この『遠慮』という意識について更に深く考察することにする。

表 3　交流環境に関する発言のカテゴリー

(I) 現状の評価
(I-i) 現状への感謝　(12)
「ここ（仮設住宅）はちゃんと布団も揃わさっていてね、1 枚の布団に長く寝れるくらいのまずスペースがあったから、本当に感謝しなきゃと思って生活させてもらってます、本当に。」(A1w)
(I-ii) 現状の受容　(10)
「私たち以上に苦労している人たちは一杯いる。私たちは助けられた方だから。」(B7w)
(I-iii) 現状への不満　(13)
「今まで一軒家にいて庭があって悠々自適に生活してたから、今は狭い。」(A5)
(II) 現状の説明
(II-i) 日常生活における生きがい　(9)
「近所とのおしゃべりをしてるから俺は若いんだな。他の人と話したりするのが一番ですよ」(B2h)
(II-ii) 精神的安定の獲得　(6)
「仕事に出ておしゃべりするのがストレス発散になるから。」(A4)
(II-iii) 震災後の交流の存在　(11)
「この仮設は何かあるよっていうとみんな集まるし、最高よね。仮設の方も（NPO の募金に）お札入れてくれたり。」(B5w)
(II-iv) 交通手段による活動への制約　(4)
「バスの便も、ちょっとそれに乗り遅れたら 1 時間待たないといけない感じになるから、前は走って間に合ったんだけど、そういう状態だから、出ないようにしてます。」(A4)
(II-v) 場の消滅による活動への制約　(5)
「日曜日のたびにグラウンドゴルフやってたんだけど、それが出来ないから出かけることもない。やることもないから。」(B1h)
(II-vi) 身体的問題による活動への制約　(7)
「座ってやることは何でもできる。歩くのは 10m で辛い。」(B7h)
(II-vii) 震災後の交流継続の難しさ　(10)
「交流っていうのはまずないね。なんていうんだべね、やっぱり津波後はこの他の人との交流みたいのが確かに無くなったね。」(B4)
(II-viii) 新たな交流の難しさ (17)
「ここに来たらここの人たちとみんなね、親しくなったからいいんだけども、それはそれだもんね。いつか別れる人たちだしさ。いつかはもう別になる人たちだから。それを頭に置くとね。」(A2w)
(III) 交流に対する意識
(III-i) 生活を活性化しようとする意識　(17)
「仮設の中にばっかりいるよりその辺を見るのもまた一つのね、健康管理まで行かなくても。外の空気にも当たらないとね。」(B3)
(III-ii) 自立心　(4)
「本当は仕事したい、若いつもりでいるんだけど。」(B11)
(III-iii) 遠慮　(13)　※表 4 で詳述

(3) 『遠慮』に見られる二つの側面

高齢者の外出行動の抑制に繋がり得ると考えられる『遠慮』に関する発言を詳しく見てみると、そこには自分と相手の立場の関係によって、以下に示す二つの側面があると考えられる。

表 4　『遠慮』に関する発言

発言者	発言
A1h	「この通り場所が狭いもんだから何かあるともうね、遠慮したような感じであんまり狭いからお互い長居もあれだしね。」
A1w	「孫が 2 人いてね、仕事が終わると子供たちの、嫁さんはね、分刻みにあれ（家事）しているような感じでね、忙しいから電話かけるのも遠慮です。」
A2h	「隣に音が聞こえないかと思って気がねするもんな」
A2w	①「仮設で音も聞こえるし、そういうわけでリラックスして話せない。悪いって言ってるばかりじゃないけど、聞こえるわけでもない、静かでしょ本当に。隣は子供も結構来てるんだよ。でもねやっぱり気を遣う。こんな 1 枚の。お互いに」
	②「こっちから（にこにこバスに）申し込むときは 10 時までに行きたいんだけど、その頃に通るバスがありますかって、聞くの。」
	③「にこにこバスより路線バスの方が自分で合わせられる。」
A4	①「同じ被災者でもみんな違う事情があるから。だから気も遣うしましてやこんな狭い所にいると私は朝早いから 5 時には起きるけど、そうするとまた気も遣うし。なるべく音のしないように、音無しでニュースだけ見て。日曜日にごめんね、うるさいでしょって話をして。」
	②「日中でも掃除機の音とか聞こえるんだけど、ここでも聞こえるということは向こうにも聞こえるということだから。トイレの音も気を遣うもん。」
B1w	「仮設に住んでいる人においでって言ってもやっぱり遠慮して来ないしね。」
B2h	「仕事を震災になってから辞めました。あまり迷惑かけてはいけないと思って。」
B3	「（仮設住宅は）タダであるということで申し訳ないのでこの辺は自主的に草を刈ったりゴミを出した後の清掃とか、環境とかな、そういうのを遊びながらやっている。」
B5w	「手作りの会にはあまり行き過ぎると先生が大変になるから行かない。」
B8	①「（他人の車に乗せてもらうことは）改めてはしない。たまに拾われるときもあるの。こう、バスに歩いていったとき後ろからきてから拾われるときもある、そのときは甘んじて乗せてもらうけどね。」
	②「どうしても便乗していくというと自分の思った用事が出来ないんだっけ。気を遣うというか、またね。人の都合もあるだろうと思えばね。」
B9	①「お茶っこ飲ませたいけど遠慮するみたいでね（中略）それぞれにやっぱり皆用事もあるでしょうし。」
	②「丁度ここはバス停が便利だから、すぐ乗れるしね、来てよっていうけど、無理には言えないなって考えてるし。」
B10h	①「仮設にいれば外に人がいるということが常に頭にあるから。」
	②「仮設に戻ると背伸びは出来ないし、大きい声でも話できないしテレビの音量も大きくできない。」
B11	「（周りの人に）入ってお茶飲みなって言っても入ってこない。（地元にいたころとは）違う。玄関まで来るけど入らない。中に入ってけって言っても遠慮してしまうね、どうしてもね。」

a）同じ立場の相手に対する「思いやる遠慮」

まず、表 4 の A4①、②や B10h①、②などの発言から、仮設住宅で新たに知り合った人との交流に際して、震災以前の近所との交流とは違い、過度な気遣いが必要とされるために相手に遠慮している状況が分かる。このような遠慮は、同じ立場の相手に対して相手の内面を尊重して起こる遠慮のことと考え、本研究では「思いやる遠慮」と呼ぶ。

b）立場の異なる相手に対する「かしこまる遠慮」

次に、表 4 の A2w②、③や B8①、②などの発言から、交通手段の提供者とその利用者などといった立場の違いがある場合、後者である高齢者は、自分のために前者である相手の行動等に影響が及ぶことを過度に想像して遠慮してしまうということが分かる。このような遠慮は異なる立場の相手の都合を尊重して起こる遠慮のことと考え、本研究では「思いやる遠慮」に対して、「かしこまる遠慮」と呼ぶ。

以上から、過度な「思いやる遠慮」を必要としない人的交流を伴う外出機会の提供や、交通手段の提供者に対して利用者が過度に「かしこまる遠慮」をする必要がない関係性の創出ができれば、高齢者の生活を活性化できる可能性があると考えられる。本研究では、その具体的方策として①震災以前の地域コミュニティを活用した交流環境の提供、②顔の見える交流による交通環境の整備が、高齢者の生活活性化に繋がると考え、実践することにした。

4．過度な「思いやる遠慮」の要らない交流環境の提供

(1) お茶っこイベントの実施

先述のとおり、生活環境・交流環境が変化した状況で暮らす高齢者は、震災以前の近所付き合いと現在の近所付き合いの質の違いを感じ、思いやりながら暮らしている人が少なくないことが分かった。そのため、震災以前の近所付き合いのように、過度な「思いやる遠慮」が要らない交流環境を創出することが、高齢者の生活を活性化する一つの方法と考え、過度な「思いやる遠慮」の要らない交流環境として、旧来の町内会のメンバーで集まる「お茶っこイベント」を企画し、2013 年 12 月 14 日に震災以前の鵜住居地区居住者を対象に行われた住民説明会の前後に実施した[5]。

交通手段が無くイベントに参加することが難しい人に対しては、チラシに連絡先を記入し、希望者に対しては会場への送迎を実施した。

(2) お茶っこイベントの内容と実施結果の概要

お茶っこイベントは計 2 回、5 町内会を対象に実施した。計 37 人が参加し、うち 5 人に対して送迎を実施した。イベントの間は住民同士で自由に交流してもらうため、軽食と飲み物を提供し、実施主体側から話題提供や誘導などを行うことはしなかった。イベントの様子を図 4 に示す。

図 4　お茶っこイベントの様子

(3) お茶っこイベント実施による効果

① アンケート調査

被災地では被災者支援として様々なイベントが実施されているため、イベントの最後に参加者に対して、他のイベ

ントへの参加頻度や本イベントへの感想などを尋ねるアンケートを実施したところ、他のイベントへの参加頻度については図 5、感想を尋ねる自由記述については表 5 に示すような結果となった。なお、表 5 の () 内の数字は図 5 における回答を示している。

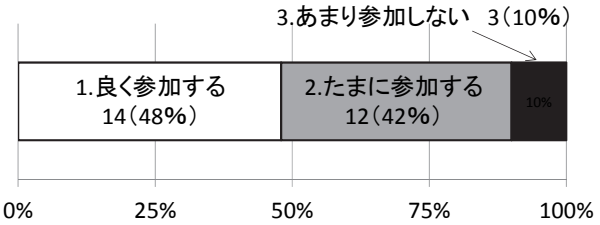

図 5 他のイベントへの参加頻度（N=29）

表 5 お茶っこイベントの感想（自由記述）の例

- 自由に話が出来て楽しかった。(1)
- しばらく会えない方にも会えて良かったです。(1)
- 何でも話し合える企画は初めて。この様な肩肘張らない集まりには大いに寄らせていただきます。(1)
- しばらくぶりで町内会の方達に会えて良かった。(1)
- 旧知の人たちに会えてよかった。(2)
- 気さくで皆楽しく過ごせて幸せを感じ、心がほぐれました。(2)
- 町内会の仲間が離れ離れになり、この様なイベントは楽しみです。(2)
- 小さな組織の方がよりよい効果のあるイベントになるので、町内会別のイベントをさらに開催してほしい。(2)
- もう少し集まってくれたらにぎやかになると思います。(2)
- 町内会の人達と逢って色々な話を聞いたりして心から嬉しかったです。(3)
- 皆さんが心をわって話せる様な会であって欲しいと思います。(3)

他のイベントへの参加頻度については「良く参加する」「たまに参加する」の回答が大多数であるが、「あまり参加しない」と回答も見られた。前後に住民説明会が実施されていたために、お茶っこイベントへの参加者数が増えたとも考えられるが、多くの参加者から好評を得ており、特に他のイベントに「あまり参加しない」と答えた参加者からも肯定的な意見が聞かれたことから、旧来の町内会単位で集まるという、過度な「思いやる遠慮」の要らない交流機会の提供には一定の外出促進効果があったと考えられる。

② 追跡インタビュー調査

次に、お茶っこイベントの際の交流内容や、その後の人的交流への影響を知るために、イベントの約 1 か月後に参加者に対して追跡インタビュー調査を行った。調査の方法及び結果は表 6 に示すとおりである。

この調査の結果、過度な「思いやる遠慮」の要らない交流環境を提供することは、その場限りの生活活性化方策ではなく、その後の継続的な活動の契機ともなり得ること、また被災地において自宅に居住する高齢者の抱える交流に関する問題を解決する手段ともなり得ることが示唆された。

5．過度な「かしこまる遠慮」の要らない交流環境の提供

(1) 顔の見える交流活動の実施

第３章で述べた通り、高齢者が外出をためらう要因として、バスの運転手や自家用車に乗せてくれる人などの交通手段の提供者に対する「かしこまる遠慮」がある。

表 6 追跡インタビュー調査の概要と結果

■追跡インタビュー実施要領
お茶っこイベントの際に実施したアンケート調査に連絡先を記入していた参加者で、調査への協力を申し出てくれた人に対して、主な質問に対して自由に回答してもらう半構造化インタビューを行った。
■追跡インタビュー実施時期
2014 年 1 月 21 日、22 日の二日間
■追跡インタビュー対象者
お茶っこイベントへの参加者 10 人
■主な質問項目
イベント時の会話内容、イベント後の活動の変化、イベントの評価など
■得られた具体的な発言
(1) 今後の活動への展開
「これから 1 か月に 1 回くらい定期的に集まろうという話になった。」 「お茶っこイベントの場を利用して、他に企画中のイベントの運営のお手伝いをお願いして、実際にお手伝いをしていただいた。」
(2) 自宅居住者の問題
「多くのイベントは仮設住宅の人のために実施されるために自宅の人はなかなか行きづらく、お茶っこイベントが貴重な交流の機会となった。」

デマンド交通が運行されている他の自治体の事例を調べてみると、例えば北海道帯広市大正地区（あいのりタクシー）、川西地区（あいのりバス）や岐阜県多治見市（市之倉トライアングルバス）などでは、デマンド交通の運行会社が地域住民への御用聞きを積極的に行い、顔の見える交流の中で利用者のニーズを細かく調査することで、過度な「かしこまる遠慮」を必要としない信頼関係を築いている。しかし、対象地域のデマンド交通「にこにこバス」の運行主体は地元で被災したタクシー会社であり、そのような活動を試行的に実施することが事実上困難な状況であった。そこで、筆者が実際に釜石市箱崎町に滞在し、顔の見える交流を行うことで、その効果を検証することにした。

(2) 釜石市箱崎町仮設住宅での住み込み活動の概要

住民との顔の見える交流を行うため、2013 年 11 月 28 日～12 月 23 日の期間に渡り、筆者が釜石市箱崎町の仮設住宅に滞在し、にこにこバスの情報提供、新規利用者登録や予約代行などを実施した。釜石市箱崎町を対象としたのは、栗林町及び鵜住居町には路線バスが 1 日 7 往復しているのに対して箱崎町は 1 日 2.5 往復と少なく、にこにこバスの必要性がより高いと考えられたためである。

(3) 住み込み活動による顔の見える交流の結果

調査期間中に、5 名が新規利用者登録を行いことになり、4 名のべ 11 回分の予約代行の依頼があり、これを行った。そのうち、新規利用者登録を行い、7 回予約代行を利用した表 4 の B1w は、これまでは働いている夫が運転する自家用車で移動しており、夫の予定によって活動が制約される状況を受け入れていたが、にこにこバスを利用することで活動の自由度が上がり、震災以降離れた地域に住んでいる友人に会いに行くなど、これまでになかった人的交流を伴う外出機会を創出し、生活を活性化させている様子が見て取れた。

このことから、顔の見える交流によって、利用者の過度な「かしこまる遠慮」が必要とされない信頼関係が構築されることは、高齢者の生活活性化にもつながる可能性があることが示唆された[6]。

６．結論

本研究では、釜石市北部地域の被災地の高齢者を対象に、外出頻度が低く、生活不活発病へと繋がり得る高齢者が少なくないことを確認し、生活が不活発となり得る意識の一つと、生活活性化のために求められる交流環境を明らかにした。具体的には、以下の結論を得た。

まず、半構造化インタビュー調査から、活発に活動を行っている高齢者にも見受けられる、高齢者が生活を不活発にし得る要因として、「思いやる遠慮」と「かしこまる遠慮」の二つの「遠慮」の意識が存在していると考えられた。

次に、「思いやる遠慮」の視点から見た生活活性化方策として、人的交流の際に過度な「思いやる遠慮」が要らないと考えられる、震災前の地域コミュニティで集まるお茶っこイベントを実施した。その結果、これまで積極的にイベントに参加することの少なかった人も参加して楽しめる可能性が示唆され、過度な「思いやる遠慮」の要らない空間を創出する有用性が確認された。また、従来支援が疎かになりがちであった自宅に居住する高齢者にとってもこのようなイベントは貴重な人的交流を伴う外出機会となることや、イベントの効果はその場限りのものでは無く、その後の発展的交流にも持続的に繋がる可能性が見て取れた。

最後に、「かしこまる遠慮」の視点から、交通手段の提供者に対する利用者の過度な「かしこまる遠慮」を軽減するために、仮設住宅に筆者が住み込んで顔の見える交流を行ったところ、地域の公共交通の利用が促進され、新たな人的交流が生まれる事例が見られ、生活活性化への顔の見える交流の有用性が示唆された。

以上のことから、被災地に居住する高齢者の生活活性化のために必要な交流環境としては、過度な「思いやる遠慮」の要らない人的交流を伴う外出機会の創出と、顔の見える交流による利用者の過度な「かしこまる遠慮」の要らない交通手段の提供が必要であると考えられる。このことは、被災地に限らず過疎地の公共交通について考える際に重要な知見であろう。

一方、今回のインタビュー調査だけではサンプル数が充分とは言えない。特に、今回アプローチできなかった実際に生活不活性になっている高齢者に対して、医師などの協力を得ながら調査を行っていくことが不可欠である。その上で、地域の高齢者が求める交流環境を継続的に提供することで、生活活性化の効果を定量的に評価し、生活活性化方策へ活かしていく必要があると考えられる。

【補注】

(1) 生活不活発病は、医学的には廃用性症候群とも言われ、過度な安静や活動量の低下から心身機能が低下してしまうことを指す。

(2) にこにこバスは、釜石市北部地域において多くの住民が仮設住宅へ移動した結果、従来の路線バスだけでは十分なサービスレベルを維持し難くなり、釜石市北部地域と中心部を結ぶ交通手段として導入された。そのため、にこにこバスは従来の路線バスと平行して運行されている点が、他地域のデマンド交通と大きく異なる点である。

(3) 例えば本論文第 5 章で紹介する北海道帯広市大正地区と川西地区、岐阜県多治見市の事例の人口 1,000 人当たりの日平均利用者数はそれぞれ 7.5 人、10.8 人、5.7 人であるのに対し釜石市北部地域の場合は 2.4 人である。

(4) 釜石市北部地域における路線バスは、旧 JR 山田線鵜住居駅周辺で鵜住居・栗林方面と片岸・大槌方面、箱崎方面へ分かれる形となっている。鵜住居・栗林方面には路線バスが 1 日 7 往復走っているのに対し、箱崎方面は 1 日 2.5 往復であり、そのサービスレベルは大きく異なる。

(5) お茶っこイベントを行うにあたっては、震災以前に地域に住んでいた住民に対して周知を行う必要があったが、地域から離れた住民に対する周知は困難であったため、住民説明会の告知と合わせてお茶っこイベントに関しても市役所から周知をしていただいた。

(6) 顔の見える交流の結果として、高齢者の生活活性化につながったことに加えて、住民のニーズをより効率的に吸い上げることが可能になり、停車場所を柔軟に増設するなど、にこにこバス自体の利便性向上にもつながった。

【参考文献】

1) 西村昌記、石橋智昭、山田ゆかり、古谷野亘(2000)「高齢期における親しい関係-「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択」老年社会科学 22(3)、pp.367-374
2) 岡戸順一、星旦二(2002)「社会的ネットワークが高齢者の生命予後に及ぼす影響」厚生の指標 49(10)、pp.19-23
3) 笹泰之、田中直人、土井雄介(2012)「高齢者向け住宅居住者の外出行動に関する研究：高齢者向け住宅居住者の生活環境に関する研究」日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 52、pp.165-168
4) 大川弥生(2013)「「動かない」と人は病む：生活不活発病とは何か」講談社、pp.184-191
5) 吉村東(2014)「郊外住宅団地の居住形態別に見た災害が高齢者の交流活動に与えた特性-戸建住宅地と集合住宅地の比較から-」日本建築学会計画系論文集 695、pp.183-190
6) 寺川優美、田中紀之、三浦研、寺川政司(2003)「豪雪・過疎地域における在宅高齢者の人的交流に関する研究　高齢者の居住継続成立要件に関する研究（その１）」日本建築学会計画系論文集 571、pp.69-76
7) 三宮基裕(2011)「中山間地域に居住する高齢者の外出行動と QOL 評価の関係：農村高齢者の QOL 向上に向けた福祉のまちづくりに関する研究」日本建築学会研究報告九州支部計画系 50、pp.89-92
8) 山崎康平、岸邦宏(2013)「過疎地域における外出促進のためのコミュニティカフェの機能に関する研究」土木計画学研究・講演集 48、No.41
9) 水野映子(2004)「高齢者の外出の現状・意向と外出支援策」ライフデザインレポート 163、pp.4-15
10) 大谷尚(2007)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学 54、pp.27-44